

「31年目の夫婦げんか」★★★★

2013（平成25）年6月14日鑑賞＜GAGA試写室＞

監督：デヴィッド・フランケル
ケイ・ソームズ（アーノルドの妻）／メルリ・ストリープ
アーノルド・ソームズ（ケイの夫）／トミー・リー・ジョーンズ
バーナード・フェルド医師（夫婦のカウンセラー）／スティーヴ・カレル
2012年・アメリカ映画・100分
配給／ギャガ

＜弁護士生活31年目は？この夫婦の結婚31年目は？＞

本作に主演し、第60回ゴールデングローブ賞・主演女優賞にノミネートされたメルリ・ストリープと私は同じ1949年生まれ。オスカーノミネーション17回と俳優では最多記録を誇る名女優の最新作である本作のテーマが「結婚31年目」なら、私が出版した『がんばったで！31年 ナニワのオッチャン弁護士 評論・コラム集』（05年、文芸社）も、かつて阪神タイガースの4番バッターだった掛布雅之の背番号と同じ31年目がテーマだ。同書は、1974年の弁護士登録以降私が「ナニワのオッチャン弁護士」として、都市問題、旅行、映画などの分野で新聞や雑誌に掲載されたコラムを中心にまとめたもの。このように私の弁護士生活31年目は日々楽しく前向きだったが、さてメルリ・ストリープ演ずる妻ケイ・ソームズと税理士（？）をしている夫アーノルド・ソームズ（トミー・リー・ジョーンズ）との結婚生活31年目の実態は？

子供たちは既に親元を離れて独立しているから、郊外にある2階建ての自宅では夫婦2人だけの生活。日本では、そんな中年から初老にかけての夫婦間の会話は、夫が妻にかける「メシ、フロ、寝る」だが、さて結婚31年目のこの夫婦は？冒頭、ケイが鏡の前でちょっと髪の毛を直し、深呼吸をして、意を決したかのように夫の寝室のドアを叩き、中に入っていくシーンが登場するが、そこでケイが発した言葉とは？また、それに対するアーノルドの受け答えとは？こんなシーンに、同じくらいの結婚暦と思いき試写室のお客さんからは思わず苦笑が・・・。

＜映画化のきっかけは、テイラーの脚本から！＞

今や日本でもアメリカでも、映画の主流は「原作モノ」になってしまっている。それはそれで悪くはないが、やはり映画本来の面白さはオリジナルの脚本にある。しかして、アメリカには、ハリウッド業界人が選ぶ、まだ映画化されていない優秀脚本を集めた「ブラックリスト」なるものがあるらしい。そして、本作が誕生するきっかけになったのは、そこに掲載されていたヴァネッサ・テイラーが書いた脚本だったらしい。

他方、本作のプレスシートには、池内ひろ美氏の「夫婦げんかのすすめ」という興味深いコラムがある。そこで彼女は、自説である「結婚三回説」をもとに、「もう一度あなたと結婚したいの」というケイのセリフを中心に鋭い分析を加えているが、なるほど、なるほど……。もっとも、そこでの分析と主張は、彼女が「夫婦・家族コンサルタント」なる職業で、人に対してアドバイスする立場だからこそ言えるもの。失礼ながら、実際に自分がどうかになると、怪しいものだ。それは、今年弁護士生活40年目を迎えた私も同じで、倦怠期を迎えた相談者の夫婦生活については、離婚問題に限らず法的にはもちろん、人間的なアドバイスをいろいろとすることができても、さて自分のことになると・・・？

いつのまにか寝室は別、夫の唯一の趣味はゴルフ番組、毎日の日課も夫婦の会話も365日ほぼ同じ。争いもない代わりに、喜びもない。メルリ・ストリープとトミー・リー・ジョーンズの名演技もあって、本作冒頭に鮮やかに描き出される倦怠期の夫婦の典型のようなこの風景は、多分私たち夫婦も、あなた方夫婦も同じだろう。しかし、それが魔法のような脚本にかかると立派な映画になり、主演女優賞にノミネートされる作品にもなるのだから、映画とは不思議な芸術だ。本作を鑑賞するについては、まずはそんな脚本の着眼点のよさに注目！

＜この「カップル集中カウンセリング」は信用できるの？＞

書店で本が売れない時代になって久しいが、それでもお手軽な「ハウツーもの」の本が結構売れていることは、新幹線の駅の売店をのぞいていると、よくわかる。したがって、一方で「死ぬまで、この生活のくり返しで、私は幸せ？」という疑問を持ち、他方で「もう一度あなたと結婚したいの」という希望を持ったケイが、そんな「ハウツーもの」に頼ったのは仕方がない。しかし、ケイが書店で見つけた、バーナード・フェルド医師（スティーヴ・カレル）が書いた結婚生活のカウンセリング本は信用できるの？

それまでは何事も夫のアーノルドに相談し、勝手な行動を取ることなどなかったケイが、①カップル集中カウンセリングを受けるためにメイン州のグレート・ホープ・スプリングスまで一緒に行きたい、②1週間4000ドルの受講料は既に振り込んだ、③航空機の手配も完了した、④アーノルドが行かないのなら、私が1人でも行く、と宣言し、当日早朝1人でタクシーに乗り込むケイを見て、渋々アーノルドも飛行機内まで追いかけたが、さて、バーナード医師のカップル集中カウンセリングとは？

＜質問はセックス関連ばかりだが・・・＞

バーナード医師を演ずるスティーヴ・カレルを見ると、彼にはこれまでコミカルな役が多かったから、私もついこの医師はホントに信用できるの？と思ってしまう。アーノルドが私以上にそう思ったのは当然だ。バーナード医師が質問してくる内容は、1日目こそ「まず長年の夫婦生活でできた傷痕を取り除くところから始めましょう」という一般論だったが、2日目のカウンセリングでは、出逢い、プロポーズ、いつから寝室を別にしたかに続いて、「最後セックスは？」と迫ってきた。また、バーナード医師がアーノルドとケイに与える「課題」も、2日目の「今晚しばらく抱き合ってください」というものから次第にエスカレートし、過激なもの（？）になっていったが、バーナード医師からの質問は夫婦のセックスに関連するものばかり。そんな「夫婦の内面」に遠慮なく切り込んでくる赤裸々な質問に対して、アーノルドとケイは・・・？

もちろん、これらの質問に対する「答え」は強制されるものではなく、あくまで相談者とバーナード医師との間のカウンセリングの結果として相談者が納得のうえで答えるべきものだが、さてアーノルドは・・・？1日目のカウンセリングを終えたアーノルドが、「ペテン師！ちゃんとあの野郎の経歴は調べたのか？」とケイに対して不平不満をまくしたてたのはある意味当然だ。さらに弁護士の視点から見れば、こんなカウンセリング契約については、いつ、どんな状況になれば途中解約できるのか？を明記しておかなければ、「インチキだ、金を返せ」「いや、カウンセリングをしたのだから金は返せない！」という争いになるのがミエミエで心配だが、さてヴァネッサ・テイラーが書いた脚本は？そして、現実にはスクリーン上にみる展開は・・・？

＜製作費はHow much？そのほとんどは出演料？＞

5月25日に観たキム・ギドク監督の『嘆きのピエタ』（12年）はすごい映画だった。近時のハリウッド大作は大量の資金を注ぎ込んだ派手なものが多いが、韓国の鬼才キム・ギドク監督の映画づくりの特徴は、短期間で製作費をかけずに完成させるということ。そんな視点で本作を観ると、出演者はケイ、アーノルド夫婦とバーナード医師の3人だけ。そして、舞台設定も、すぐに舞台劇にできるような①自宅、②カウンセリング室、③ホテルの部屋の設定だけだから、製作費はほとんどかかっていないはず。まずケイだけが飛行機に乗り込み座席に座っていると、続けてしぶしぶ荷物を持ったアーノルドが機内に入ってくるシーンがあるが、これもバッテリーのトラブルでしばらく運航停止とされていたボーイング787を格安料金で借り切ることも交渉次第で可能だろうから、ほとんど費用はかかっていない（？）はずだ。

もっとも、本作はメルリ・ストリープとトミー・リー・ジョーンズという2人のビッグネームの共演だから、この2人の俳優の出演料は高いだろう。しかし、『インボツシブル』（12年）におけるナオミ・ワッツのように大津波の中で死ぬような思いで水と格闘するとか、多くの女優たちが裸身をさらす迫真の演技のような特別なシーンはなく、あくまで日常生活の延長としての生活風景ばかりで構成された映画だから、演技達者なメルリ・ストリープやトミー・リー・ジョーンズなら大きな苦労はないはず。そんな目で本作の製作費をみると、How much？また、その中で2人の出演料が占める割合は何%・・・？

＜大人用の童話として最適！倦怠期の夫婦のバイブルに！＞

『シックス・センス』（99年）に始まったインド人のM・ナイト・シャマラン監督作品の売り文句は、「決して結末を明かさしないで下さい」だったが、それは本作も同じ。もっとも、シャマラン監督作品は映画を観ていてもなかなかその結末が見えてこないのが常だが、本作のハッピーエンド的結末は最初からミエミエ・・・？だって、そうでなければ本作をつくる意味は全くないからだ。そこで問題は、バーナード医師のカウンセリングを受けること自体を嫌がり、同医師に悪態ばかりついていたアーノルドが、後半から結末にかけてどのように変化していくのかということだが、それが一筋縄ではいかないのは当然だ。

夫婦で同じベッドで抱き合った2日目をはじめとして、文句ばかり言っているアーノルドも「カネを払ったのだから、言われることを実践してみなければ損」という大阪人的発想（？）で、バーナード医師が提示するさまざまな過激な「課題」にも挑戦したが、さてその結果は・・・？一時はカウンセリング契約を途中で止めると宣言し、バーナード医師も良心的に料金を半返してくれたらしいが、何やかや言っている、やはり何ごととも実践してみる努力が大切だったらしい。その結果、あれほど頑固だったアーノルドの考え方も次第に・・・。

本作の結末に向けてのアーノルドの変化ぶりは、是非あなた自身の目で確認してもらいたい、本作にみる「大人用の童話」はまさに倦怠期の夫婦に最適。『シンデレラ』や『星の王子様』など子供用の「童話」の定番はたくさんあるから、3才児、5才児のプレゼントにはそのどれを送っても大喜びだろうが、本作は結婚31年目に限らず、アーノルドとケイのような倦怠期にある夫婦の「大人用の童話」として最適。そんな夫婦のバイブルになるのでは？